

ミルクのおばちゃん

高 島 巖

ミルクのおばちゃんが見えるといふので、穂子さんは朝から大元氣です。

「お母さき、お母さま、お母さま、もう何時間たつたら、ミルクのおばちゃん、いらつしやるの？」

「さうね、電報では十一時となつてゐるから、あと二時間ですよ」

「あら、あと二時間？……お母さま、穂子どの着物をきてお迎へに行くよ」

「さあ、このあひだお父さまが上海から買つて来て下さつた支那服はどう？」

「ええ、ええ、さうだわ、あの着物がいいわ。でもねお母さま、あの着物、まだミルクのおばちゃん御存知ないでせう、穂子のこと、ほかの子とお間違へになりやしないかし

ら」

「大丈夫よ、ね、おばちゃんが汽車のなかから出てゐらしたら、いきなり、ミルクのおばちゃん、ツて、おばちゃんのかびつたまへかぢりついてあげればいいわ」

「あら、ミルクのおばちゃんのかびつたまへ、かぢりつくの？ まあ、うれしい」

穂子さんは、いきなり、お父さまのお部屋へとんで行きました。

「お父さま、お父さま、お父さま、ありがたう、ごさいます」

「なんだい、大きな聲をだして」

「ううん、お禮に来たの」

「なんのお禮に？」

「支那服の」

「支那服がどうしたんだい？」

「いいえ、ね、あれなの」

「なんだい、面白い子だね、そのあれなの、ツていふのはなんだい？」

「あのね、ミルクのおばちゃんにかぢりつくの」

「ミルクのおばちゃんにかぢりつく？」

「それがね、支那服のおかけなの」

「おかしなことをいふね、ミルクのおばちゃんにかぢりつくのが、どうして支那服のおかけなんだい」

「なんでもいらの」

x

「お母さま、お母さま、お母さま」

x

「穂子さんは、また、お母さまのところへ、とんで来ました。」

「ね、お母さま、ミルクのおばちゃん、どんなにほびでせう」

「まあ、なにをいふの、この子は」

「いいえ、ね、穂子がくびツたまへかぢりついたら、ミルクのおばちゃん、よろこんで下さるかしら」

「そりや、およろこびになるでせう、お前のこと、大變可愛がつてゐらツしやるからね」

「穂子も、ミルクのおばちゃん、とても好きよ、お菓子だつて、おもちゃだつて、ごほんだつて、なんだつて買つて下さるんだもの」

「まあ、それで、穂子はおばちゃんが好きなの？」

「ううん、それだけぢやないの、この前ゐらした時ね、穂子のお顔を両方のお手手ではさんで、ぢいツと穂子の目をごらんになりながら、穂子ちゃんも大きくなつたらミルクのおばちゃんになつてね、ツておつしやつたの。穂子わけがわからなかつたから、なあに？ ツて云つたら、この次つて云つて、穂子のあたまをなでて下さつたの」

「まあ、さう。それぢや、今日ゐらしたら、そのわけが聞かれるのね」

x

x

（ミルクのおばちゃんのくびつたまへかぢりつく……）

(ミルクのおばちゃんになつてね、のわけがきかれる……)
穂子さんの心のなかは、もうミルクのおばちゃんに會ふ
ことではいつばいになつてしまひました。

× ×

穂子さんとお母さまが停車場へ來た時は、汽車はもうホ
ームのなかへ入りかけてゐました。

「お母さま、大變よ、もう汽車が來ましたよ」

大急ぎで入場券を買つてホームへ出ますと、汽車がち
やんと止りました。

「どの車かしら」

と云つて穂子さんが目をころろさせてゐますと、丁度
穂子さんたちの上の窓ががらツと開いて、そこから、
にこにこ笑つてゐるミルクのおばちゃんのお顔が見えまし
た。

穂子さんは、あんまりうれしくて、すぐには聲が出ませ
んでした。

「まあ、穂子ちゃん、随分大きくなつたのね、あら、支那
服なんかきて、可愛いこと、随分たくさん待つて？ ええ

穂子ちゃん、……あら、どうしたの？ なぜなんにも云つ
て呉れないの？ 穂子ちゃん」

穂子ちゃんは、おばちゃんのくびつたまへかぢりつくこ
とを考へてゐました。でも、穂子のことすぐおわかりにな
つたんだからよさうかな、とも思ひました。

そのうちに、もう穂子さんは、ミルクのおばちゃんとお
母さまの二人のあひだに手をつながれて、驛のそとへ出て
ゐました。

夏のお陽さまがかゝツと地面の上をてりかへしてまぶし
いなかを、穂子さんとミルクのおばちゃんとお母さまは、
なんにも云はずにお家の方へ歩いてゐました。でもお顔は
三人とも、うれしくて仕方がないやうに、にこにこしてゐ
ました。

× ×

一週間たつて、とうとうミルクのおばちゃんがおたちに
なる日が來ました。

「おばちゃん、どうしてかへるの？」

「だつて、もう歸らなければならぬ時が來たのよ」

「でも、おばちゃん、なにかお忘れにならない？」

「なんにも忘れやしないわ」

「なんにも？」

「ええ」

「ううん、おばちゃん、だめよ」

「あら、なにか忘れたことあつて？」

「あ、この前おいでになつた時のお約束」

「ああ、ミルクのおばちゃんになつてね、のわけ？」

「さう」

「さうでしたね、でもね、それは、もう一ぺんおあづけにして置ませう」

種子さんは、それから、ミルクのおばちゃんのことばかり考へてゐました。

「お母さま、ミルクのおばちゃんのお家、東京ね」

「ええ、さう」

「おばちゃん、いつもなにしておらつしやるの？」

「おばちゃんはね。この世の中をもつともつとよい世の中

にするために、その仕方をたくさんの人たちにお知らせする仕事をしてゐらつしやるのよ」

「あら、ぢやあ、ミルクのおばちゃん、随分、いい人なのね」

「ええ、その通りよ」

「お母さま、ほかの人もあのおばちゃんのこと、ミルクのおばちゃんツていふの？」

「いいえ、そんなことないわ。でもね、おばちゃんは、どんな人にも、ミルクのおばちゃんになつてあげたい、といつも考へてゐらつしやるのよ」

「ぢやあ、おうちでミルクのおばちゃんツていふわけは、なあに？」

「それはね、かういふわけなの。お母さまがまだ赤ん坊の時ね、お母さまのお母さまにおつばいがなかつたの。でねお母さまはあたりまへのごはんがいただけるやうになるまで、ずうつとミルクばつかりいただいてゐたの。ですからね、ミルクは、赤ちゃんのお母さまには、なくてはならないものだつたの。ところがね、お母さまがだんだん大きくなつてお姉さまになつて、東京の女學校に通ふやうになつ

た頃、丁度今のミルクのおばちゃんがお母さまの一つ上の組においでになつたの。でね、まだ一年生のお母さまにはわからないことがたくさんあつたのよ。そんなわからないことがあつたり困つたことが起つたりした時、きつとあのおばちゃんが出て来て、お母さまをかばつて下さつたのよ。それでお姉さまになつたお母さまには、赤ちゃんの時のミルクのやうに、あのおばちゃんがなくてはならない方だつたの。わかつて？ それでお家では、あのおばちゃんのこと

童話

フットボール

水谷年恵子

雲の上で雷の子供がボール遊びをしてをりました。雲の破れ目からボールが下界へ落つこつてしまひました。ボールは富士山のでつぺんへボンと落つこつて來ました。そのボールは空のお月様の十倍もあるフットボールでした。

ボンと落つこつて來たと思ふと、すぐ又雷の子供がフツ

と今でもミルクのおばちゃんツていふのよ」

×

×

種子さんは、このおはなしをきいてはじめて、ミルクのおばちゃんのおつしやつたことがわかるやうな氣がしました。(なくてはならない人になること)

この世の中で、いちばんいいことは、なんでも出來る人になることではなくて、なくてはならない人になることだといふことが、はつきりわかつたやうな氣がしました。

トボール目がけて、ドシンと天から降つて來ました。雷の子供はいきなりフットボールに抱着きました。抱着くとすぐ、雷の子供とフットボールとが一つのかたまりになつて富士山のお山のでつぺんからコロコロところがつて山の下の方へ落ちていきました。ころがつていく中に、